呉郡張氏における精神活動

南部松雄

一

中国六朝時代の文化、とくに南朝のそれは、知識人である貴族――地方の名族によって生み出されたものであった。周知のように、南方の豊潤な風土と、人間社会の自由な雰囲気とが、時代の変遷の中で貴族たちの生活に多様性を与え、また精神活動を洗練し複雑化していったのである。

魏晋以来、各地に勢力の根をおろしていった地方の代表的豪族は、次第に社会的地位を確立し、南朝のそれぞれの時代にあって、名門貴族としての権勢を保持し続けた。貴族としての彼らは、各世代において経済的には盛衰の波に漂うことはあっても、――時にはそれを乗り切らんがために、社会的優位を求めることもあったが、――「名族」であることの意識は、良きにつけ悪しきにつけ確固たるものであった。政治面での絶対的権力や、富裕な土地財産に固執することよりも、生活に不自由のない俸祿があれば、その下で自由な教養人として風流を楽しみ、更に、一族の名徳を輝かせることが、名門の誇りとして尊ばれるという傾向が支配的であった。従ってこの時代の思想史ないしは精神史において、これらの「名族」意識に支えられた彼らの生活態度や精神活動そのものが、顕著な特徴となっている。

一方、六朝時代は東晋（三一七―四一九）末から劉宋（四二〇―四七八）にかけての間において、仏教が本格的に理解されるようになり、さきの時代から受け継がれた清談の風潮に助長されて、思想界を大いに湧上きがらせた時代であった。廬山の慧遠を中心とする著しい活動が、その代表的なものであったが、老荘の無の思想と、仏教の空との相異という本質論や、伝統的な儒家倫理と、仏教信仰の実際面とにおける問題、更には道仏二教の融和対立についての議論などは、その後も知識人たちの関心を捉らえ、彼らの精神活動における重要課題となって、それらをめぐる種々の議論は、宋斉梁の各時代にあって活発に続けられた。このことは、外来宗教である仏教の、中国知識社会への本格的浸潤を意味していると共に、道教が従来の民間信仰や神仙

説の域から脱却して、宗教としての理論形態を備え、知識人によって広く支持されるようになったことを意味している。隋書経籍志は「道、仏者、方外之教、聖人之致遠也」といって、道教や仏教に批判的ではあるが、この時代の道教について「三呉及び辺海の際、これを信ずること綸々甚だし。」と述べて、道教信奉者の多いことを認めている。

ところで、知識人である貴族が仏教や道教の信奉者である時、それが家門の信奉として、子孫に累代伝えられたという傾向が見られる。すなわち仏教についていうならば、廬江の何氏一族がそうであり、ここに論を進めようとする、呉郡の張氏がそうであった。また道教については、王羲之、琅邪の孫恩、更には呉郡の杜京産などの一族がそうであり、会稽の孔稚珪などは、道教信奉が「積世の門業」となっていることに重要な意味を認めていた。(1)

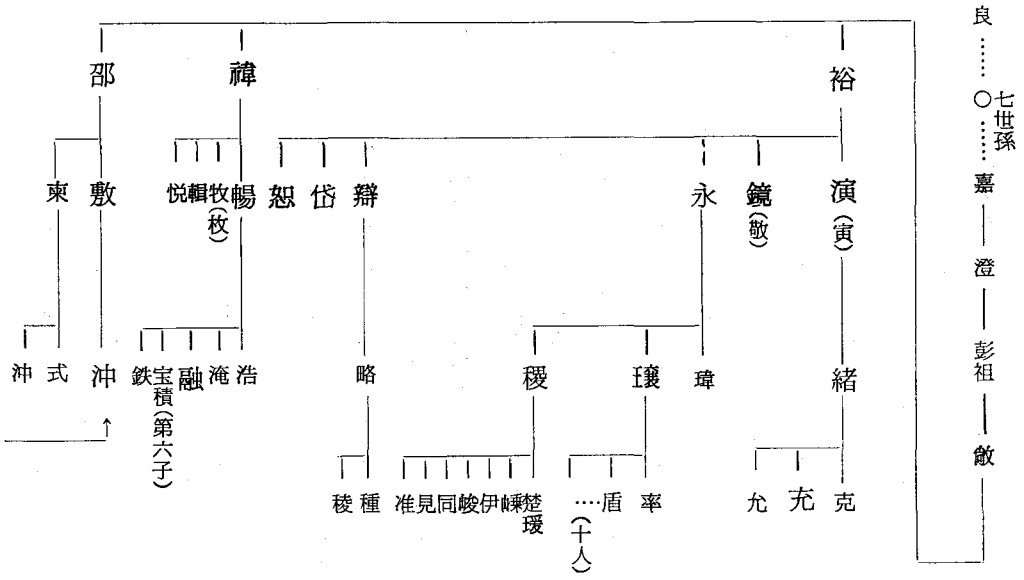
仏教あるいは道教の信奉が、家門に定った信仰として累代継承されてゆくことは、一族の名門意識と相俟って、家門の安泰な存続を示す意味さえ持っていたと考えられる。

いま、わたくしは、それらの名門貴族の信奉態度のなかでも、張氏一族の精神活動を取り上げてみようと思う。張氏は累代仏教信奉者の家で、一族と当時の仏僧たちとの交わりも多く、その中でも張融は、一門が仏教信者であることを認めながら、自らは仏教と道教を調和融合せしめようとする一致論を説いたが、結果的には、その道教的立場を重視されるようになった。彼の一致説及びそれから派生した種々の議論は、この時代の思想史において重要な意味を持っているが、ここではそれらの議論を問題とする前段階ともいうべき、張氏一族内部における、いわば縦の関係における精神活動の諸相について、少しく検討してみようと思う。(2)

二

まずはじめに、張氏一族の系列について概観してみると、次のようになる。(3)

張氏は漢の張良の後裔で、七世の孫が始めて呉に遷り、喜、澄、彭祖、敞と続いたといわれる（宋書五十三張茂度伝）が、宋書にみえる張氏は、張茂度（張裕）を始めとする、その子張演、(4)張鏡、(5)張永の兄弟（この系統をⒶとする）、つぎに張邵、張敷父子、敷の弟張柬（これをⒸとする）、及び張暢（邵の兄偉の子）の兄弟、張枚、張輯、張悦などと、暢の子張浩、張淹（Ⓑとする）という三つの系統からなっている。(6)宋代における中心人物は、Ⓐの張演、張鏡、Ⓑの張暢、Ⓒの張敷などであり、この四人は名を齊しくして後進の模範的存在であったといわれている。（宋書四十六張暢伝）Ⓐの系統にあって、張演、張鏡のいずれも早死したが、弟の張永、張岱、張辯と共に「張氏五龍」として名を知られていた。永、辯、岱は及ばなかったが、演、鏡の名は最高であったと伝えられている。（南齊書三十二張岱伝）南齊書にはⒶでは張岱の他に、演の子張緒、永の子張瓌、Ⓑでは暢の子張融、Ⓒでは柬の子張沖などの伝が見られる。梁書ではⒶの緒の子張



充、永の子張稷、及びその子張嵊、更瓌にの子張率などが見えているが、Ⓑと©の末裔は登場していない。なお、陳書にはⒶの辯の孫張種、張稜の二人の名が見られる。

さて、これらの系列に見られる中心人物のそれぞれの精神活動はいかなるものであったろうか。

それらを検討するために、とりあえずこの時代において、初代的意味をもつ裕、禕、邵の兄弟、及び彼らの子供たちの世代（演、鏡、永、辯、岱や、暢、敷など）、更にはその子供たち、いわば三代目以下の世代（緒と充、瓌と稷、及び融など）というように、一族を初期、中期、後期に三分し、それらに見られる特徴について順次検討してみようと思う。

初期の世代に当る、張裕、張禕、張邵の三人は、いづれもそれぞれの子孫のために生き方を示すに相応しい、いわば先駆者としての性格を備えていたということが出来る。晋書忠義伝に入れられている張禕は、東晋末恭帝の身代りとなって、劉裕（宋武帝）の毒薬を自ら仰いで死ぬという、晋の終焉と運命を共にしたかのごとき人物であった。張裕（茂度）（三七六―四四二）は宋初の建国に功をなして地位を得た。文帝が荊州の謝晦を討った際、晦と交のあった彼の出軍が遅かったので疑われた。裕は早速と湘州刺吏の弟張邵に援兵させ、邵の誠節をもって帝は罪を加えなかったという。晩年折よく職を去り、家に還って充分な財産に頼りながら會稽太守として七年間野沢を優遊していたという。（宋書五十三張茂伝）彼には風流人としての活動があったことを示す記事は見られないが、梁高僧伝には、道汪の弟子で内外の

学を兼ね談論をよくした道闇に請うて戒師としたことが見えている。（第七道汪伝）宋初の隆運期にあって、自らの生活に規律を加えようという意識が張裕にあったのかも知れない。[7]その弟張邵[8]は武帝の信望が厚く、征虜大将軍となり雍州刺史などを加えられた。「悉心政事、精力絶人」といわれるほど意欲的なところがあって、宋初特有の一つのタイプを示している。（宋書四十六張邵伝）仏教信奉に関する業績も広きに亘っていて、僧亮が廟を造営するに際し、健人百頭大船十艘を給与してこれを援助した（僧伝十三僧亮伝）のを始め、関中の多難を避けて健康に来ていた僧業のために、姑蘇に閑居寺を造営した。（僧伝七道温伝）これらに見られるように、実力者としての物質的援助を惜しまなかった点が、彼の仏教への関心の特徴といえるだろう。また道温伝によると、慧遠の下で学を受けた道温は、元嘉中に襄陽の檀溪寺にあって大乗経をよくし、数論にも明かるかった。

「時に呉国の張邵襄陽に鎮す。子、敷これに随ふ。敷、温の講を聴いて還る。邵問ふ、『温、いかん』と。敷曰はく、『義解は以って微道を析くに足るも、心はいまだ易くは測るべからず』と。邵みづから往きてこれに候ふ。まさにその神俊を挹まんとし、のち従容としていひて曰はく、『法師もし能く還俗すれば、まさに別駕を以って相ひ処らしむべし』と。温曰はく、『檀越乃ち桎梏を以って人を誘へり』と。即日辞して江陵に往く。邵これを追ふも及ばず、歎恨す。」

この挿話は、張邵の仏教への関心の限界のようなものを示していて興味深いが、同時にその子張敷に見られる慎重な態度は、より発展した関心として対称的に示されている。なお、張邵は呉興太守として卒するが、「終りに臨んで命を遺はし、菜果を祭して葦席をもって轜車とす。」という葬儀を行わせている。

つぎに、これら三人を親とするその子供たち、すなわち、「張氏の五龍」といわれた五人の兄弟及び張暢や張敷などの、いわばこの時代の二代目ともいうべき中期における中心人物たちはどのようであっただろうか。

張演、張鏡の二人については、「子演太子中舎人、演弟鏡新安太守、皆有盛名並早卒」（張茂度伝）とあるだけで詳細は判らないが、その有名程度からすると、長命であったならば相当すぐれた人物となっていたに違いない。[9]また、張鏡は顔延之と交渉があったらしく、光祿大夫であった顔と隣合わせに住んだが、顔は談議するのに飲酒して騒がしく、鏡の静然として声なく辞義清玄として語る様子を耳にして、いたく心服し以後酒を飲まなかったという話が伝えられている。[10]

張永（四一〇—四七五）は元嘉十八年刪定郎となっているが、「書史を渉獵し、能く文章を作る」と共に、「隷書をよくし、音律に暁かる」かった上、「騎射、雑芸、觸類善を兼ねる」といった、万能教養人であった。その上、自ら用いる紙や墨などは、自分で別製するといった凝りようで、上表を手にした文帝を感心させるほどであった。（宋書五十三張永伝）彼ほどではないまでも、張敷[11]においても、同じような傾向は見られて、「性、貴風を整へ風韻甚だ高し、好んで玄書を読み、文論を兼属す。少にして盛名あり。」（宋書六十二張敷伝）とい

われている。

一方、張暢（四〇八―四五七）は、しばしば北方との交渉に当ったところから、武人的な風格を感ぜしめるところがあり、さきの二人とは趣きを異にするが、この時代に特有の南方貴族の意識的な態度は、かえって明確に示されているほどである。すなわち、彼の応答は敏捷、音韻は詳雅であったので、北魏人が称賛したというし、南譙王義宣の擧兵の際、元佐である張暢が簡人（閲兵）するや、その音儀容止に衆はみな目を見はり、ために命を尽くさんとしたといわれている。（宋書四十六張暢伝）　ところで音儀容止の風潮は、六朝初期から社交的機会の多い南朝貴族の間で、儀礼尊重の見地から重要視されてきたが、この時代では張氏一族が特に熱心であり、張敷はその中心人物であった。「よく音儀を持し、詳緩の致を盡くせり。」といわれる（宋書六十二張敷伝）彼の頃より、人と別れる時握手のごとき特別な仕草が行われ始めていたようで、「張氏の後進今に至るまでこれを慕ふ。その源流の起こるや敷よりするなり。」（同上）といわれているほどである。対人関係の社交的風習に見られる洗練さは、彼らの世代において一層その度合を増していったものといわねばなるまい。

また、一族内の近親者の相互関係、殊に親と子の結びつきについても、この世代では顕著な事実が見られる。張敷についていえば、その晩年孝武帝の即位するや、詔を賜わり孝道を称せられて侍中を追贈されている。(12) もともと感受性の強い性格であったらしく、生後母を失い、もの心ついてから死生の分を知り、母を慕う気持からその遺品を捜し、やっと見出した扇子を大切にしてそれを見ては涕流して母を思ったという少年時代を送っている。また先に引いた高僧伝の記事は、張邵張敷父子がそろって仏教に関心のあったことを示していて、そこには父子の屈託のない会話のやりとりが窺える。張邵の臨終については先にふれたが、その父の死に際して張敷は成服すること十余日で始めて水を飲み、葬が終って塩菜をも口にしなかったので身体を壊した。張裕が見かねて思いとどまるよう勧めたが、ますます感慟して続けたので裕は怒ってしまい、以後往来しなかった。（以上張敷伝）このように極端に過ぎるまでの態度が、至孝の称賛の対象となったのであろうが、それらを支えた肉親に対する彼の感情自体が、よほど強烈なものであったことが知られる。なお、隋志は彼に詩集のあったことを記している。

また、張永にみられるのは、戦死させた子供への愛惜の情であった。武人であると同時に万能教養人である彼は、若い頃より身体を使い切って力を出し尽くそうという意欲があり、晩年にも「年すでに老ゆといへども至気いまだ衰へず。優遊閑任は意甚だ楽しまず。」といった気構えが見られたほどだが、かつて北方討伐の時大敗し、寒雪の中に士卒は離散し彼自身も脚を負傷して辛じて身を免れた。その際第四子を失ったが、彼はこれを痛悼し霊座を立てて生きているものへするがごとく、飲食衣服などを供えるという手厚さであった。（張永伝）　これらの例に見られる近親者に対する心情の繊細なところは、彼らの精神状態における一つの大きな特徴といえるが、仏教僧を通じての仏教との結びつきにおいて彼らを眺める時、なんらかの関連が感じられるように思うのである。さきにあげた張邵張敷が接した道温は、「少き

より琴書を好み、親に事ふるに孝をもって聞ゆ。」（道温伝）という人柄であり、また呉国の人僧璩は、内外の学を兼ね律行は完璧であり、自ら具体的な律文を案出し道俗の帰依者は車軌相接するほど集り、張敷もまたこれに傾倒した。（十一僧璩伝）張永も道慧や法安などの僧に請うて涅槃や仏性の指導を受けており、彼らが十九や十八という年少者であることに驚歎した。（八法安伝）[13] また、道営は、慧観や慧詢などの律師について、当時行われていた十誦律を学び僧祇律の専攻者であったが、[14] 張永は彼のために京師の婁湖苑に閑心寺を造営して還居を請うた。（十一道営伝）その建立の年代は不明であるが、さきの泰始七年（四七一）前後から、彼の没年の元徽二年（四七五）の間ではないかと考えられる。いづれにしても、張永の場合、所謂「大敗」や子との死別などの体験が、仏教への関心と結びつき、ひいては功徳の意味をもつ仏寺造営にまで発展していったということが出来ると思うのである。

このようにみてくると、中期にあたるこの世代の人たちに見られる特徴は、各々で多少の違いはあっても、それぞれが繊細な感受性を持前としており、知識人として洗練された多彩な教養を身につけることに積極的であり、しかも、それに伴った自信に満ちた態度が備わっていたということである。もっともこれらのことは、裏をかえせば名門であることの強い自意識に支えられた態度の過剰表現とも見られなくはないが、彼らに見られる純真素朴な感情は、このような特徴をより一層独特なものとしていると考えられる。

三

それでは次に後期、所謂三代目以下ではどのようであったろうか。張緒、張充、張瓌、張稷など、更には張融について考えてみよう。「五龍」の一人である張岱は、当然先の代に入れられるべきであるが、伝が南齊書に入り、時期的にも後期に属すと共に、これら二つの世代を繋ぐ人物と考えられるので、ここでふれることにする。[15]

張岱（四一四―四八四）に見られる顕著な事実は、彼が「五龍」の一人の中に加えられていながら、その生活は貧困の苦しさに追われていたことであろう。その意味で、この時代の貴族としての権勢と、経済的現実との矛盾を、最も端的に示した人物であったようである。

当時の貴族の収入源が俸禄に依存するものであったことは周知のことであるが、[16] 名門貴族といえども爵位の有無上下によって収入の差異は大きかった。こうした状態の下では、同族者の中でも高名とそうでない者との間には、当然それだけの相違があったに違いない。更に現実の問題として、親族――特に母方の――が物質的あるいは精神的生活面に、大きな影響を与えたことも否めない事実であった。「張氏五龍」の中でも「最高」でなかった岱は、こういった点では、むしろ張氏における犠牲者的存在であったようである。母方の親族が貧しく、これを養育しなければならなかったので、辺地に住みつかねばならなかったことが、彼には何よりも先づ大きな負担であったようである。

彼の本伝には、年八十の母を養うために、岱が官職を捨てて帰ったので、有司が制に違ったかどで糾弾しようとし、孝武帝は「過ぎたるを觀るは以って仁を知るべし。」といって取り上げなかったという話を伝えている。こういう状態にある彼は、張家の財産を分けて箱の封中に入れておき、融通をつけ合うという制度を考え出さざるを得なかったのである。のち、就官への意欲はめざましいものがあったが、晩年に近い南齊の始めの頃、兄の子張瓌と共に功労のあった弟張恕に対して、太祖高帝が晋陵郡を与えようとした。その時、岱がいうには、「恕はまだ政治に携わる余裕はありません。それに美しい錦はみだりに裁ってはいけないものです。」太祖が恕の人となりは充分心得ているし、瓌と同勲にしようと思うというと、岱が言った。「もし家が貧しいという理由で祿を賜うのであれば問題ではありませんが、功績を口にして事を推すということは、わが一門の恥でございます。」張岱のこの返答では、「家貧賜祿」ということが是認されている反面、「語功推事」を恥と決めつけていて、そこに貧しいながらも威厳を尊重する名門の痩せ我慢といった気持が窺えて興味がある。晩年、彼は呉興にあって寛恕をもって著名であったという。（以上南齊書三十二、南史三十一張岱伝）

いづれにしても張岱には、宋書に現われた張氏一族の、教養人としての積極性に富んだ生命意欲はほとんど感じられないようである。彼は七十一才の生涯で晩年の僅か五年間を南齊に過ごしたというだけで、南齊書列伝に加えられており、その意味からいっても、所謂二代目でありながら、後期の人物として次の世代との連続の中にある人物であるが、三代目以降に見られる一部の特徴の要素は、以上に見られる彼のうちに既に潜んでいたということが出来よう。

演の子張緒（四二三―四八九）は張岱より五年遅く没し、やはり齊に在世する期間は短くて、活動の中心は宋の後半以後にあった。若きより「清簡寡欲」で名を知られたが、南齊書三十三の彼の伝に見られる彼に対する評価を捨いあげてみると、宋の明帝は「緒を見るごとに輒ちその清談を歎じ、」袁粲は「臣、張緒を觀るに正始の遺風あり、宜しく官職を為さしむべし。」と述べ、ほかに「緒、情に榮祿を忘る。朝野みなその風を貴ぶ。」とみえている。南齊に入ってからは、「緒、善言素望甚だ重」かったため、太祖高帝がこれを敬異し、世祖武帝も、「緒、位を以って我を尊ぶ、我、德を以って緒を貴ぶ。」と評しており、風流者としての彼の評判のほどが窺える。世祖の頃、吏部尚書、散騎常侍などに転じ、永明七年、国子祭酒、光祿大夫にて卒したが、「口に利を言はず、財あれば輒ちこれを散じ、清言端坐す。」という様子であった。南齊書の史臣の評も張緒をとりあげて、「張緒、衿を凝し気を素にし、自然に標格たり。搢紳の端委は朝宗民望たり。それ緒のごとき風流者は、豈、これを名臣と謂はざらんや。」と述べている。この時代には特に珍しいほどの栄利に恬淡とした風流人であったことがわかる。高帝の建元四年（四八二）初めて国学を立てるや、国子祭酒となったが、学問的には周易に長じ、当時の宗となるほどであった。また、太祖と共に莊厳寺において僧達道人の講義を聴いた時、遠くて聞えなかったので、天子の座を移すことは出来ないからといって、僧達の方を近くへ来させて話をさせたといわれている。（以

上南齊書張緒伝）この挿話について南史は、「聴僧達道人講維摩」としており、彼と交渉のあった僧についてみても、慧亮は「法華、大小品、十地などを講」じ（七慧亮伝）、道琳も「涅槃、法華をよくし、浄名経を誦」じ（十三道琳伝）たといわれているところから、法華、維摩、般若などの経典を中心に学んだものと思われる。父張邵の葬儀に「菜果を祭し、葦席を轜車とし」たことは先にもふれたが、同様のことは緒にも見られ、「命を遺はし、蘆葭の轜車を作り、霊上に杯水香火を置き、祭を設けしめず。」というようにかなり複雑化し、緒を親兄のごとく敬重していた張融が、酒を霊前に齎し、酌飲慟哭して「阿兄の風流、頓に尽きぬ。」といったとされている。（張緒伝）序でながら、張敷の弟張柬の際には、「我を祭するに郷土の所産を以ってし、牲物を用ひるなかれ」という徹底ぶりであり、子の張沖は呉に還り、園中で果菜を取って来て流涕のうちにこれらを薦めており（南齊書四十九張沖伝）、張氏における仏教的葬儀礼の具体的な様子に多少の変化を見ることが出来る。

つぎに、張緒の子張充（四四九―五一四）は、のちに「充の兄弟みな軽俠、充少き時また細行を護らず」と評されたように、操行を保たなかったので評判が良くなかった。張緒自身もその放蕩ぶりを心にかけていたが、一廉の理屈を心得ていた充は、二十九才の時、「三十にして立つといわれていますから、来年からはやります。」といって、翌年からは身を修め節を改めて学問に励み、老子・易に明るく清言をよくするようになった。しかし汚名は簡単に拭えず、後日王儉が武帝に横槍を入れた。充は怒って書を送り、所懐を述べて自分を狂人扱いにする者を相手にすることは出来ないときめつけた。（梁書二十一張充伝）南史では、王儉からこの書を示された父張緒は、「これ（充）を杖うつこと一百」と記していると共に、後にこの書を見た沈約が、「充はじめこれがために敗れるも、のちこれがために成らん。」といって驚歎したと伝えている。彼の二十代の終りの頃は、折しも宋朝末期に当り、世の中が穏当を欠いていたことを考えると、青年張充の心境のほども窺われるようである。

ついで張永の子張瓌、張稷の兄弟についていえば、先づ張瓌（―五〇五）は、充とほぼ同年輩と思われ、宋末と齊末の二つの王朝転換期を身をもって経験している。彼に見られる特徴の一つは、巧みな保身術をもってそれらの転換期を乗り切ったという事実であろう。宋末、蕭道成（南齊太祖）が、呉郡太守である劉遐と瓌との間隙を利用しようとしたのは、道成が張家の勢力を配下に入れることにその目的があったとしても、瓌自身にとっては、結果的には劉遐を偽り、叔の張恕の兵と共にこれを斬って呉郡太守となることに意味があったのであって、従父の張沖が「瓌、百口を以って一擲出手して盧を得たり」と評した通り、一族を賭けての大博打の結果の勝利であった。また、のちの南齊末においても、先づ王敬則の反逆の際、平東将軍、呉軍太守であった瓌は松江にこれを迎撃したが、敬則の軍の鼓声を聞くや散走し、郡を棄てて民間に逃れ、事が済んでからまた郡に帰った。一応、免官削爵されたものの、やがてすぐに光祿大夫となっている。ついで、東昏侯に石頭城を鎮せしめられたが、すぐに城を棄てて宮に還った。梁朝になるやまた光祿大夫に返り咲いている。彼は性格としても放

胆な楽天家であったらしく、父の代からの部曲数百をかかえ、豪華な家に住み、伎妾は房に満ちる程であり、子供が十人以上もあったので、その中にはましな者がいるだろうといっていたという。[17] いい年をしているにも拘らず、伎妾を畜えているのを譏られたのに対し、「我、少にして音律を好む、老いてまさに平生の嗜みを解せり。また一存なからんと欲するに、ただ未だこの処を遣る能はざるのみ。」と答えたというが、人生に対する根強い執着心が窺える。(南齊書二十四張瓌伝) 以上のごとく、張瓌が宋末、齊末の二つの王朝転換期を難なく切りぬけたという背後には、いうまでもなく、名族としての物的ないし人的勢力という余裕に支えられるところがあったためであろうが、更にその矜恃からくる、厚顔無恥ともいえる尊大な態度によるところがあったと思われる。

張稷 (四五〇—五一二?)[18] は齊朝時代には大きな活動は見られないが、梁朝建国に自ら積極的に立ち働いたという点で瓌と趣きを異にしている。梁書十六の彼の伝は、母の看病とその死後に、幼時の彼が尽くした献身的態度と、充、融、卷などの族兄と共に「四張起家」として世間に知られていたことから書き始められている。南史の叙述は全体的に詳細で、彼とその周辺を具体的に描いている。稷は瓌の異母弟で、自分を産んだ母劉氏を敬愛する念が厚かった。「長兄瑋、よく琴を弾ず。稷、劉氏先にこの伎を執るを以って、瑋の清調を爲すを聞き、便ち悲感頓絶し、遂に終身これを聴かず。」「父永及び嫡母丘、相い継いで殂す。六年墓の側に廬す。」「生む所の母劉、先に琅邪黄山に假葬す。建武中改めて葬礼を申ぶ。……幼より長ずるに及ぶまで、數十年中、常に劉氏の神坐を設く。」などといわれているところに、彼の繊細な気持が窺われるが、さきの至孝で誉の高かった張敷と異った感じを受けるのは、その繊細さが機を見るに敏な策略家としての彼の神経を成り立たせていたからかも知れない。中興元年 (五〇一) 蕭衍 (梁武帝) の兵が建康に迫るや、稷は王珍国の副将として東昏侯の城内の軍事に当っていたが、時運を感じるや珍国と謀り、腹心張齊に東昏侯を弑せしめ、南齊王朝に終止符を打つこととなった。梁朝になって散騎常侍中書令となり、国子祭酒、領驍騎将軍などとなったが、武帝の宴席でいや味を口にし顔に現わしたところ、帝は、張瓌が郡主を殺し、張齊またその君を弑したごとき兄弟に、名誉があろう筈はないと語ると、稷も黙ってはおらずに、自分が帝のためにたてた勲功の大なることを強調した。武帝はその鬚をとって、「張公、畏るべし」といったという。(南史三十一) その反面、無駄な口吻を嫌ったり、人とよく交わるかと思えば、家にこもって仏経を読むといった放縦な有様であると共に、また「官を歴るも畜へなく、奉祿を聚めて皆これを親故に頒かち、家に余財なし。」といわれるくらいであった。のち、身代りに立った長女の犧牲も空しく、北魏に通じた州人に殺害される。

このように張稷には、異母兄の張瓌には見られない、鋭い積極性があり、それが陰影を感じさせるほどでさえあるが、窮極のところは彼を支えていたものも、家門の権勢を意識した矜恃とそれから派生した気まぐれな余裕とであったようで、その点では張瓌と異るところはない。

以上のように、この世代における充、瓌、稷の三人は、その生没年

代をほぼ同じくすると思われ、しかも宋齊梁の三代に亘る人生をそれぞれの形で過ごした。

宋末までの青春時代を放蕩のうちに過ごした張充にあっては、齊以後ますます爛熟味を発揮していった南朝政治文化の風潮が、彼自身の肌合により一層適合したものであったと思われるし、武人でありながら消極的に、しかもある意味では老獪ともいえる手段をもって、変動期に身を処した張瓌と、梁武帝をして「張公可レ畏」といわしめるごとき鋭敏さを備えていた張稷とは、タイプの違いはあっても「張永至レ稷三世、並降二萬乗一、論者榮レ之」とか、「瓌宅中常有二父時旧部曲数百一」などといわれるごとく、結局は名だたった一門の権勢と父ゆづりの財力を基底としていた点では同じであった。しかも、より注意を換起せしめることとして、張充を除く彼らにあって、風流人としての文化的事蹟がそれぞれの伝の中にほとんど見られないということである。張稷には僅かに、「不レ得レ志常閉レ閤読二仏経一」ということが見え、その母を慕った気持との関連において肯首されるところがあるが、さりとて上述の他の連中に見られたような、仏僧との交渉を示すような積極性のある記事なども見当らない。これらのことは、彼ら自身の精神的素質そのものによることは先づ確かであるにしても、複雑な時勢の変遷を経験した中にあって、彼らが名門貴族の一員として、自らの安泰と子孫の存続とを意図して、現実対処のために腐心奔走するに終った結果の現われであるといいうるのではなかろうか。彼らの子供はいづれも非常に多人数であったが、王の子の張率を始めとして、弟張盾らも文才の誉高く、稷の子張嵊もまた「少にして方雅、志操あり。清言をよくす。」といわれ、秀才に挙げられたほどであった。（梁書四十三張嵊伝）ただ、彼らが親たちの犠牲として受けた惨めさは被うべくもなく、盾は「家に遺財なく、ただ文集ならびに書千余巻、酒米数甕あるのみ」（南史三十一）という状態であったし、嵊もまた「家の禍を感じ、終身蔬食布衣して手に刀刃を執らず、音楽を聴かず。」（同上）といった影響を受けなければならなかったのである。

四

世代としては緒、瓌、稷などと同じである張融は、南齊書四十一及び南史三十二の彼の伝によると、その誕生は緒の子充や稷よりも五、六年早い宋文帝の元嘉二十一年（四四四）で、南齊明帝の建武四年（四九七）に没した。[19] もともと家が貧しく孝武帝の時に新安王北中郎参軍となったが、帝の仏教行事の際、周囲の者が多額の寄進をしたのに対して、融はわずか百銭であったので、帝は「融は殊に貧ならん。當に序するに佳祿を以ってすべし。」といった。のち、出でて華南の封溪県令となった。彼は貧困の切実さのゆえに、積極的に俸祿のための就官を願っている。のちに従叔張永に与えた書には、貧しい現実を具体的に述べ、仕官の希望とそのための尽力を要請している。

「融、昔、幼学を稱せられ、早に家風を訓へらる。不敏といへども

率ひて以って性を成たせり。布衣葦席は弱年より安んずる所、簞食瓢飲は楽しまざるを覚えず。ただ、世業清貧にして民生多く待てり。榛栗棗脩、女贄既に長じ、束帛禽鳥、男禮已に大なり。身を勉めて官に就き、十年七たび仕ふ。代耕を欲せずんば、何ぞこの事に至らん。……いま聞く、南康に守を欲くるを。願はくはこれにならんことを得ん。融、階級を知らず、階級もまた融を知らず。……」

また王僧虔に与えた書にも、「融は天地の逸民なり。進んでは貴を辨ぜず、退いては賤を知らず。兀然として造化し、勿として草木のごとし。實にもって家貧累積し、孤寡傷心す。八姪俱に孤にして、二弟頗る弱し。……」と見えており、それらには就官への希望を自分個人の問題としてではなく、その周辺の累族者への負担のためとして述べており、自分自分はむしろ恬淡とした状態であることを強調しているのが注目される。

彼の風貌挙動については、「形貌短醜、精神清澈」といわれるごとく、よほど変っていたらしく、既に若い時、山賊に執われた際にも、顔色を変えず平気でうたを口ずさんでいたので、賊も危害を加えなかったほどであった。容貌もさることながら、奇行が多かったこと機智に富んでいたことなどが、生活面での特徴であった。すなわち、音辭容儀尊重の風潮は、前述のごとく張敷以来非常なものであったが、張融に至ると、極端さを増した奇行の一つとさえなったようである。南史によるとその様子は、「坐すれば常に膝を危くし、行けば則ち歩を曳く。身を翹し首を仰げ、意の制すること甚だ多し。列に随ひて同行すれば、常に稽遅して進まず。」といった風で、見る者は驚いて集まり来て市をなすほどであったが、融は慙じる気色もなかった。また何戢の家に行くつもりで誤って劉澄のところへ行った時、車を下りて門に入ってから「そうではない。」といい、戸外から澄の方を眺めて「そうでない。」といい、更に席について澄の顔をみてから「全くそうではない。」といって立去った。このような無意味なまでの極端さは、彼の機智に富んだ性格と相俟って、次の挿話に見られるように、その生活態度をより一層特異なものにしている。

「時に魏主、准に至りて退く。帝問ふ。『何の意ぞや、忽ち来たり忽ちにして去れるは。』と。いまだ答ふる者あらず。融、時に下坐にして声を抗げて曰はく、『無道にして来たるをもって、有道を見て去れるなり。』と。公卿みな以って捷となせり。」

「融、草書をよくし、常に自らその能を美む。帝曰はく、『卿の書は殊に骨力あり。ただ恨むらくは二王の法の無きことを。』と。答へて曰はく、『臣に二王の法無きを恨むにあらざれ。また二王に臣の法無きを恨まんことを。』と。」

「王敬則ち融の革帯垂寛し、殆んどまさに骼に至らんとするを見、これにいひて曰はく、『革帯はなはだ急なり。』と。融曰はく、『既に歩吏にあらざれば、急帯何するものぞ。』と。」

いったい、機智や奇行が生活態度の中に重きを占めるという傾向は、宋末以来洗練の度合を増して来た、当時の貴族の一般的風潮であったが、張融に見られるそれらの中には、彼特有の反骨意識あるいは反俗精神が潜んでいるように思われる。そういう意識が最も端的に現われたのが、「融、扶して入り榻に就き、私かに酒を索めてこれを飲

む。難問既に畢はり、乃ち長嘆して曰はく、『ああ仲尼、獨りなに人ならん。』」といわれる、永明二年（四八四）の揔明観における孔子誹謗事件であろう。更にまた、武帝が彼に北使李道固と接見させた時、道固が「張融というのは、あの宋の彭城長史張暢の子であるのか。」と尋ねたのに対し、融は眉をひそめしばらくして「先君、不幸にして名、六夷に達せり。」といったことなどについても、それらは単に奇を衒っただけのものではなくて、独自性を尊ぶ彼の反骨意識の現われであったと見ることが出来る。孝義に厚く「忌月三旬、不聴樂。」といわれた彼は、また、父暢が恩義を受けた人に対しては、誠実にしかも鄭重な態度をもって接した。かつて、父暢が南譙王義宣に党し官軍に殺されかけた時、張興世によって免れたが、興世の卒するや、融は土を負いその墳を成したし、その子欣時が死罪に問われたのを、これに代って死ぬことを子良に乞うている。また、暢が丞相と合わなくて殺されようとした時、竺超民の諫言で免れた。臨終に暢は必ず竺の子孫に報いるよう遺言したが、超民の孫微が母の喪に会うや、貧しかったので融は往きてこれを手厚く弔うと共に、のち微に兄事した。これらに見える彼の誠実さは、彼が単に外面ばかりに囚われた浮薄な人間ではなかったことを示しているといえよう。

張融は五十四才で病卒するが、遺言して白旌を立てさせ、祭を設けさせず、また家人に塵尾を捉らせて屋に登って復魂の礼を行わせた。「自らまさに雲を凌いで一笑すべく、三千もて棺を買ひて、新衾を制することなかれ。左手に孝経・老子を執り、右手に小品・法華経を執らん。妾二人は哀事畢らば各々家に還らしめよ。……」遺言に具体的に示されているところは、彼の平生における関心の範囲の広さを示しているし、あとに残った者への細心の注意を窺うことが出来る。

張融伝に見える「門律自序」は、「吾が文章の體は、多く世人の驚くところとなる。汝、耳を師とするに心を以ってすべく、耳をして心の師とならしむべからざるなり。……」といって、自己の「文章の體」の独自性について述べ、「汝、もしまた別に體を得れば、吾、拘らざるなり。」と相手の可能性を認めている。また、「吾、昔、僧の言を嗜むも、多く法辨を肆にせり。これ盡く言笑に遊べるにして、汝ら幸ふことなかれ。」と述べて自己の人生経験の反省を語り残しており同じような意味のことは「又云ふ」のところで、「人生の口は、正しく道を論じ義を説くべし。ただ飲と食と、この外は樹網のごとし。吾つねに爾らざるを恨みとなせり。爾らまさに振綱すべきことなり。」というところにも述べられていて、風流を好むあまり、清談の軽薄な風潮へ流れ込んだ自己への悔恨の情を示している。

「子を戒める書」では、より一層教訓としての意味を強調し、「……けだし家聲を隤さざれ。汝もし父祖の意を看ざれば、汝の見んことを欲するなり。號哭してこれを看るべし。」といって父祖の意を見ることを強調している。

ところで、弘明集巻六に入れられている「門律」[20]は、彼の思想的立場を示す上で最も根本的なものであり、そこでは道教と仏教とは究極のところは一つであり、その本が同じで迹が異るのであるという、所謂道仏一致論を説いている。[21]彼はその中で、道人と道士（仏徒）が論争するさまは、大空を飛んでいる鴻を遠くから見て、越人はこれを鳧だ

とし、楚人は乙だといって争うが、鴻自身はあくまで鴻に過ぎないということと同じであるとし、[22]「夫れ、澄本一といへども、吾自ら倶にその本を宗とせん。鴻迹すでに分かるれば、吾己にその集るところに翔けん。汝、専ら仏の迹に遵ふべくして、道の本を侮るなかれ。」と結んで融合論を説いている。彼のこの主張は、周顒によって逐一反駁され、張融周顒の論争となって当時の思想界を賑わすこととなり、「仏迹」「道本」の解釈を発展させた結果、張融の思想的立場が、道教とより強い結びつきを持ったものとして理解されるに至るのである。[23]

ここで注意しておきたいことは、この「門律」そのものも、本来はあくまでも張融が張氏一族の子孫累族のために作ったものであり、その意味からすれば、さきの「門律自序」や「又云」、更には「戒其子曰」などと同等の目的を持っているものに他ならないということである。それは彼自身「門律」のあとに続く「二何両孔周剡山茨に与へる」書の中に、「魄後の餘意をして、弟姪に繩墨せしめんと欲するが故に門律數風を爲る。」と述べ、また「重ねて周に書を与へあはせて所問に答ふ」る書簡でも、「外すでに化して魄首に極まるも、また子弟地に留るがために、方寸の旧都をして日夜荒没し、平生の困るところをして横馗して草せしむるを欲せず。ゆえにこの門律を製す。」といっているところからも明らかなことであって、その意味からすれば、これら一連のものと同じように、家訓的な性格が多分に含まれているという事が出来る。[24]

つまり、張融はこれらの中に、子孫累族への指針を示したのであって、一つには自分自身の生活経験への反省から教訓を導き出し、他には彼らの将来における人生理念として、道士と道人の争いの空しさを明らかにし、道教と仏教とが本来二つのものではないという、融合を主張した一致説を説いたのであった。「重与周書拝答所問」の書において、「仏と道とにあらずんば、門なにをもって律せん。」と明言している所以であろう。

ところで、張融にあって、道と仏とは二つのものではないという一致論を子孫に示した意味はなんであったろうか。それを説明するものとして、一つには姻籍関係による道教への妥協接近ということが考えられ、いま一つには、彼自身の精神活動の本質的性格によるところであると考えられる。前者について、「門律」の始めで「舅氏奉レ道」といっているその母方とは、累世、道教信奉に熱心であった會稽の孔氏であり、孔稚珪伝に「外兄張融と情趣相ひ得たり。」（南齊書四十八）と見えている孔稚珪その人であった。更に珪の「蕭司徒に答へる書」（弘明集巻十一所収）では、積世の門業として信奉している黄老の教えは、簡単に棄てるに忍びないことを説き、「昔、かつて（道・仏）一同の義を明らかにし、かつてこれを張融に訓ふ。融乃ち通源の論を著はす。その名少子、少子の明かにする所、道仏を會同す。融のこの悟は民の家より出でたり。」と明言しているのによって、融の一致説が孔稚珪の影響を受けていることは充分に考えられる。そして、この点に重きをいたすならば、張氏の一族中で母方の親族から精神的影響を受けた最も顕著な例として、その歴史の中で重要な意味を持つこととなる。後者、すなわち彼の精神活動そのものについて、彼の姻籍関係を無視するにしても、その周辺を取り巻く道教的な風潮が、彼に与

えた影響は決定的なものであったといわねばならない。さきにあげた隋志の記載を待つまでもなく、当時の呉郡は道教の中心地であり、多数の道教者がそこから現われている。その一人である陸脩静から、融は弱冠にして「異人」として認められ、白鷺の鹿尾扇を贈られた。また、かつて海路交州へ赴いた際に作ったといわれる「海賦」は難渋であるが、無限に続く大海原に感じた神秘的感動をよく伝えている。

「……吾、遠職荒官たりて、海を將き地を得たり。関を行き浪に入り、渚を宿とし波を経たり。懐を傅き觀を樹て、朝夕に長満たり。東西里なく南北天のごとし。懸烏を反覆し、菟色を表裏せり。(25) 壮なる哉水の奇なるや、奇なる哉水の壮なるや。故に古人これを以ってその見るところを頌ふ。吾、翰に問べてこれを賦はん。……」（以上序文）

「……洪洪とし潰潰として日月を浴びたり。漢を星墟に淹し、河を天界に滲ましむ。風は何に本づいてか自ら生じ、雲は從るなくして空に滅す。麗色を籠んでもって煙を拂ひ、懸暉を鏡かせて以って雪を照らす。ここに乃ち方員は我を去り、混然として情を落とす。気喧くして濁れるも、化静しておのずから清し。心終ることなきが故に滞らず、志敗れずして成ることなし。……仁者はこれを見てこれを仁なりといひ、達者はこれを見てこれを達せりといふ。咤者は上善をこひねがひ、吾、信なるかな、それ大なりとなさん。」

わづか一端に過ぎないが、これだけによっても彼には道教的雰囲気に感化されるだけの素質は既に充分具わっていたことが察せられる。

このような張融にあって、道教へのより積極的な傾倒が見られず、結果的には道仏調和融合の立場としての一致論を主張したということは、彼の意識の中に道教への傾倒に簡単に踏み切ることの出来ない何ものかが潜んでいたのであって、それを支えたものが張氏という根強い名門意識ではなかったろうかと考えるのである。孔稚珪のいう「實に門業本づく有るを以って、一日に頓棄するに忍びず。」（答蕭司徒書）といった気持は、張融においても全く同様のものであったに違いないと思われる。ただ、彼は一門の先人や同輩とは様子の変った「異人」であったあまり、過去における彼らの仏教に対する態度には飽き足らず、それらに批判的であったのであろう。若き日、孝武帝の仏事に、彼だけが僅か百銭の寄進を敢えてしたというエピソードは、その貧困状態もさることながら、少くとも一般的風潮に対する彼の批判意識を示しているとはいえないだろうか。更にまた、彼の生活態度に見られる奇行や機智は、保身手段のために策謀を弄し、現実生活に汲汲としている連中への反抗であったようにさえ思われるのである。

いづれにしても、一族の従来の仏教信奉に対する彼の批判的な気持が、彼自身をより思弁的にし、その結果彼の思想内容として形成されたものが、道仏融合一致論として現われたということが出来よう。

張氏一族における張融の位置を、このような見地より眺める時、名門貴族の知識人としての彼の文化活動が、より思索的傾向をもって発展したというところに、一つの意味を見出すことが出来るように思われる。しかもその主張が、根底において調和融合という、極めて妥協的な共存性を説いているということは、それ自体が消極主義であるとしても、彼自身が後継者あるいは累族たちに示すには充分な意味が含まれていたと思うのである。

しかしながら、本来がそのような意味で説かれた彼の主張が、その書簡によって、「今、諸賢に奏す。以っていかんとかなさん。」（書与二何両孔周剡山茨）として世間に提示せられた時、もはやそれは、単に私的な意味のみを持つものとして済まされる筈はなかった。問題はそこから出発されねばならなかったのである。

五

以上、わたくしは本論において、煩雑な叙述ながらも劉宋から梁に至る時代を中心とする、所謂南朝名門貴族のなかでも、とくに呉郡の張氏一族を取りあげ、その精神活動を彼らの生活態度に即して眺めてみた。

その初期の段階にあたる張融、張緯、張邵などにあっては、時代の変遷の中にあって社会的影響を多分に受けながらも、いわば、一族の先駆者的存在としての意義を、敬虔な人生の中に残したところに共通したものがあったといいうるようである。

中期における彼らの子供たち、張永、張暢、張敷などの世代にあっては、彼ら自身の神経は繊細で感受性に富んでおり、名門知識人としての自覚が明確になると共に、多彩な教養を積極的に身につけるという傾向が見られた。張緒においてそのような傾向は一層洗練した形で現われ、宋後半から齊にかけての彼の活動時期にあって、その風流人としての華やかな名声は最高の域に達した。一方、ほぼ同じ時代の張岱は、これと様子を表裏するかのごとく、貧困な現実に追われる犠牲的存在であった。彼において、名門貴族という権勢と破綻を含んだ現実生活との矛盾の一端が、露呈していたかの感がある。この二人に見られる相違は、世代としては岱は緒より上位であるけれども、中期と後期の時期的な性格を象徴していたともいえよう。

後期にあたる張充や張瓌、張稷に至ると、タイプの違いこそあれ、いづれも処世における要領の良さといった態度が見受けられ、殊に宋末と齊末の変転期を、身をもって体験した瓌や稷にあっては、名門の権勢と親ゆずりの財力とを余裕にした尊大な態度をもって、自らの保身と子孫の繁栄を重視するという現実性が強く、さきの時期に見られた知的教養人として風流を楽しむ傾向はほとんど見られなかった。

このような一族の生活態度と精神活動の流れにおいて張融を眺めるとき、彼の一族内における意義は決して小さなものではない。彼の人間的特徴は、反骨精神に満ちた強い個性にあると思われるが、その彼にあって道仏二教の融合一致という妥協的な主張がなされた。その原因の一つとして、姻籍関係である孔稚珪の影響による道教への接近ということが考えられるが、根本的には、彼の精神活動の本質がそこに現われたものと思われる。すなわち、当時隆盛を極めていた道教的雰囲気の中にあって、彼自身若き頃からそのムードに感化されるに充分な素質を持っていたにも拘らず、道教への完全な傾倒というところまでには至らなかった。彼を支えていたものは、門業としての仏教信奉であり、一門のうちの一人として、これを簡単に放棄することが出来なかったに違いない。その意味からすれば、独自性を尊ぶ彼の反骨精

神も、最終的にはその名門意識の中に吸収されてしまったといいうるかも知れない。

道教への傾倒に完全に踏み切ることの出来なかった彼の道仏融合一致論は、同等に、従来の一族の仏教に対する態度そのものについて、批判的な意味を示すものであるとも理解される。すなわち、単に耳で聴き口で論じるに過ぎなかった所謂清談仏教の風潮から、より一層思弁性をもったものへ発展させようとする意図があったのではなかろうかと考えるのである。結果的には清談の軽薄な風潮に流れ込んだという、彼自身の悔恨の情はこれを示しているといえるであろう。

いうまでもなく、清談仏教という性格から脱し切れなかった張融の主張は、仏教本来の信仰態度からすれば、ほど遠い距離にあったものであろうし、また、道教の立場からすれば、仏教者の転向として歓迎されるような意味を持っていたとも思われる。本論で特に問題としたかったことは、彼の道仏二教融合論が、張氏一族の内部において占めた意義についてであって、張氏自身が当時における第一級の名族でなかったとしても、そこに、南朝貴族社会の知識人にみられる、名門意識と精神活動の一つの典型を知ることが出来ると思うのである。

註

(1) 何氏については、南史三十何點伝に「與……、呉国張融、會稽孔德璋爲莫逆友、點門世信仏」
張氏については、弘明集六張融門律に、「吾門世恭仏、舅氏奉道」
王氏については、晋書八十王凝之伝に「王氏世事張氏五斗米道」
孫氏については、晋書百孫恩伝に「琅邪人孫秀之族也、世奉五斗米道」
杜氏については、南齊書五十四杜京産伝に「世伝五斗米道、至京産及子栖、京産少恬静閉意宋宮、頗渉文義専修黄老」
孔氏については、弘明集十一孔稚珪書幷答に「民積世門業、依奉李老、以冲静爲心」

(2) 呉郡張氏については、既に矢野主税「張氏研究稿」（長崎大学学芸学部社会科学論叢五）に実に詳細な研究があり、本論を進めるに当って参考とさせていただいた点が多かった。張氏と仏教の関係については、最近、撫尾正信「呉郡張氏と仏教」（竜谷大学小笠原宮崎博士寿甲記念史学論集）があり、仏教との交渉という点で示唆されるところが多かった。

(3) 矢野氏による呉郡世系表は、張氏の関係が一見して判然とする系譜である。撫尾氏もこれを参照されているが、本論でも次に示す系譜はこれに依っている。

(4) 宋書四十六張暢伝、五十三張茂度伝などには「演」、南齊書三十二張岱伝には「寅」に作る。

(5) 宋書張茂度伝、南齊書張岱伝などには「鏡」、宋書四十六張岱伝、張暢伝には「敬」に作る。

(6) 宋書では巻五十三でⒶだけを、巻四十六にⒸとⒷをまとめている。この区分は南史でも受け継がれている。Ⓑは張禕伝が晋書に入れられて宋では一代を欠き、張暢が中心となっているから、宋書南史ともにこの系統を最後にしているものと思われる。

(7) 呉郡張氏が始めて仏教と交渉をもつようになったのは、東晋後半の張彭祖に始まると思われる。僧伝五道壹伝によると、道壹は姓が陸で呉郡の人であり、その弟子道寶は「性張　亦呉人　聡慧夙成　尤善席上　張彭祖王秀琰皆

見推重　並著逆之交焉」であるという。撫尾氏が指摘されるように、道蘅その人が呉郡張氏の一族であったかどうかについては不明であるが、いづれにしても同郷の仏教者との親密な論談を通じて、東晋社会に支配的であった清談仏教に接したものと思われる。

(8) 南史三十二によると没年は元嘉九年（四三二）

(9) 隋志は宋新安太守張鏡撰になる「宋東宮儀記二十三巻」を載せている。また、弘明集十二所収の「譙王書論孔釈」に対する「張新安答」は、厳可均全宋文では後者を張鏡の作とし、前者を東晋の譙王司馬尚之と見做している点に矛盾がある。宋の南譙王劉義宣と解するとしても、張鏡と交際があったかは不明で、張新安が張鏡であったかどうかは判らない。

(10) 宋書七十三顔延之伝によると、彼が光禄大夫になったのは元嘉三十八年（四五三）頃と思われる。孝建三年（四五六）七十三才で没する間の数年のことであろうか。

(11) 宋書六十二張敷伝によると、彼が四十一才で死んだのは、孝武帝の即位（四五二）以前の間もない頃であったと考えられる。

(12) 張敷伝「世祖即位詔曰、司徒故左長史張敷、貞心簡立、幼樹風規、居哀毀滅、孝道淳至、宜在追甄、於以報美、可追贈侍中、於是改其所居、稱爲孝張里」

(13) 法安伝の記事を信用すれば、法安は永泰元年（四九八）四十五才で没しているから、この年は明帝泰始七年（四七一）頃となる。宋書八明帝紀によると、張永の大敗は泰始二年である（通鑑は泰始三年春正月とする）から、第四子との死別の以後ことである。

(14) 撫尾氏は張氏が義解僧のみならず律僧と深い交渉を持っていたという意味からこの事実を重視されている。（前掲書七二―七三頁）　なお、張永の没年を昇平二年（四七八）とされるのには承服しない。

(15) 南齊書三十二張岱伝に「…五州諸軍軍後将軍南悉州刺史、常侍如故、未拜卒年七十一」同書三武帝本紀永明二年（四八四）の条に「呉興太守張岱爲南悉州刺史」とあるのによる。

(16) これを説明するものとしてしばしば引合いに出されるのが顔氏家訓涉務篇の「江南朝士、因晋中興南渡江、卒為羇旅、至今八九世未有力田、悉資俸禄而食耳」である。

(17) 張瓌の子の一人である張率（四七五―五二七）は、幼時から文才に富み、一日に一篇の詩を作り、賦や頌に至って十六才で二千余首にも及んだ。秀才に挙げられ、文衡十五巻、文集三十巻（南史に四十巻）が世に行われた。（梁書三十三張率伝）

(18) 梁書十六張嵊伝に「進號鎮北将軍……州人徐道角等、夜襲城害稷、時年六十三」とあり、同書二武帝本紀天監十三年（五一二）の条に「安北将軍青冀二州刺張稷進號領北将軍」とあり、この年又はそれ以後に殺害されたことになるが、いまはこの年と見做した。

(19) 本論を補うために張融略年譜を付する。

四四四	（文帝）元嘉二十一年	生る
四五七		父張暢卒す
		新安王北中郎参軍
		封溪令（「海賦」を作る）
		秀才対策中第に挙げられる
		儀曹郎
四六一	大明五年	祠部倉部二曹　兼掌正厨
		安成王撫軍倉曹参軍
四六五	（明　帝）泰初元年	
四七二	（後廢帝）泰豫元年	
四七四	元徽二年	
		この頃征北将軍張永に書を与う
		また吏部尚書王僧虔に書を与う
		釈法獻と交あり
		太傅掾　驃騎豫章王司空諮議参軍
		中書郎
四七九	（齊高帝）建元元年	この頃長沙王鎮軍竟陵王征北諮議
		司徒従事中郎
		この頃吏部尚書何戢と交わる

四八三　（武　帝）永明元年
四八四　永明二年　揔明観で孔子をそしる
四九〇　永明八年　司徒右長史
この頃黄門郎太子中庶子司徒左長史文宣王・何胤・劉繪・僧法友などと交わる
「門律」を作る
四九四　（明　帝）建武元年
四九七　建武四年　卒す　五十四才

(20) 麗本では「門律」、明本では「門論」に作る。

(21) 張融の思想について道仏「一致論」とか「同一論」とかいう語が次の各論に見られる。
常盤大定「支那に於ける仏教と儒教道教」（六〇一頁）
久保田量遠「支那儒道仏交渉史」（一二六頁）
森三樹三郎「六朝士大夫の精神」（大阪大学文学紀要第三巻三二〇頁）
前二論は、張融の立場を「道本仏迹」に規定し、殊に久保田氏は「道士張融」と見做されている。

(22) 南史七十五顧歓伝には、「張融門律を作りて云ふ」とし、「道之與仏　通極無二」にこの部分を続けて門律の内容としている。

(23) 張融その人の思想は、それらの論争を通じて把握されなければならないのは当然であろうが、ここでは問題をそこまで広げないで、「門律」本来の目的に、張融の意図を看取することにとどめる。

(24) 守屋美津雄「六朝時代の家訓について」（日本学士院紀要第十巻第三号）は「家訓」の意味を家誡、誡子書、遺言、与子書、与子姪書などに拡大させて考察されており、南北朝の家訓の特徴として、家々によって異った生活態度が生れ、それを取捨撰択することが大切であったため、自叙伝がつけ加えられていること、及び宗教への関心が見られることを指摘されている。

(25) 左思呉都賦に「籠鳥免于日月、窮飛走之棲宿」とある。ここでは日の出日の入りを繰返し、月影の変化を経過する意味であろう。